

# 見つける!

<上>

## もうひとつの生き方。

実像の人生求め帰農、帰山現象も

680万人の塊

「2007年問題」に関心が高まっている。戦後、日本人の暮らしに希望が見え始めた1947年から三年間に生まれた巨大な同年齢の人口の塊、「団塊の世代」が六十歳の定年退職を迎えるとき、経済や社会に与える影響をどのように解決するか、という問題だ。

この世代六百八十万人のうち定年退職を迎える正社員は二百八十四万人、退職金の総額は八十兆円とみられる。厚生労働省の調査では、企業の二〇%が、意欲的な労働力の減少とベテランの技術の損失に危機感を持っているという。年金など社会保障の財源が若い世代にシワ寄せされる、という問題もある。一

### 2007年問題を前に

方では、巨額の退職金を保持した新しい六十代を、豊かな消費者層とみて、シニア・マーケットをターゲットにしたビジネスが構築されている。

しかし「2007年問題」にもっとも関心を持っているのは、当の「団塊の世代」だろう。高度成長経済を支え、バブルを切り回してきた企業戦士たちは、ビジネスの世界以外での生き方をあまりにも知らない。

戦争を知らない最初の世代で、食糧不足を体験していない最初の世代でもある。大量消費、使い捨て文化に染まってきた。耐えること、工夫することにもない。一部には「定年帰農」という現象も起きている。「団塊の世代」は、農村を離れ、都会に出て、核家族を日本の暮らしの標準にした世代でもある。それが、再び田舎に帰ろうとしている。

あるべき暮らし

林野庁の調べでは、ここ数年間に新たに林業に就業した人の三割がUターン、Jターンであるという。2007年から「定年帰農」「定年帰山」はもっと増えると予測されている。

兵庫県出身の民俗学者柳田国男は七十五年前に「都会人のいるだち」を分析して、その底には「土を離れた不安がある」と指摘している。

「衣食住の材料を自分の手で作りぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄に不安にも又鋭敏にもしたのではないかと思ふ」(『都市と農村』1929年)

大量消費、使い捨て、テレビのバーチ

カル文化に染まってきた人たちの中には、いち早く「あるべき暮らし」を求めて、別の生き方を探り、試みている人がたくさんいる。虚像の価値から、手でつかむ実在へ、目を向け始めている。金では買えない何か、制度や規範にばられないもうひとつの暮らし方を求めて、新しい人生に踏み出した人たちが、それはエコロジーの追求であったり、スローライフ、スローフォードの暮らし方であったりする。

もうひとつの、自分らしい人生をつかみとる努力をしている人たちが、実現した人たちが、応援する人たちの物語を、あらたな人生に発露しようとしている世代の人たちに贈ろう。

## 団塊の戦士に休息のとき



そやっ 土があったんや...

# 西播奥地 地球のリズムで暮らす



今井夫妻のにわとりは平飼い。元気に鶏舎を走り回って、エサをついばむ



播磨の豊かな自然に囲まれて、鶏舎がたたずむ

「いまい田舎農場」のホームページ  
<http://www.cin.ne.jp/~imaifarm>

## アトピー症状

今井さんは明石市生まれ。慶応大経済学部在学中、環境や人権問題に関心をもち、大阪市の中学校教員になっ

た。同僚だったひさ代さん(仮名)と結婚。子どもができたが、アトピーの症状が出た。「子どもを育てるのは土の上だ」と思った。「教員をやめて、百姓になる」とひさ代

さんに言った。

「ちょっとは好きなことをさせてあげよう」とひさ代さんは譲った。当時の勤め先は「荒れる学校」。和夫さんは生徒指導や家庭訪問で毎晩帰りが遅かった。「これでは過労死になると心配していた。和夫さんは、藤井寺市の、有機農業をやっている研究者のもとに半年通った。有機農業のたい肥には鶏ふんが不可欠だ。有機の野菜作りには養鶏をセットにした

ほうがいい」と学んだ。

自然農法の卵は「工業生産的卵」の三倍から四倍の値段でも売れる。農薬を使わず青虫を手で取ったキャベツは、一玉千円にもなる。「スタートは自然養鶏から」と決め、六年間の教員勤めをやめた。

## 子育てはやっぱり土の上で

食品添加物の勉強もした。数万羽単位の養鶏場はエサに輸入トウモロコシを使う。残留農薬、遺伝子組み換え、抗生物質の使用が気になって

いた。「本物の卵を食べてもらおう」と意欲を燃やした。

米、麦のくずと魚粉。それに季節の野菜や野草。「春は菜の花の卵になり、今はダイコンの葉の卵になります。季節によって味が微妙に違う」と言ってくるお客さんもいます」と今井和夫さん。

## 夕日に手合わして

キャベツの、畑に捨てられる外側の葉は甘みがあって、鶏はうれしそうだ、という。白菜の葉では卵の黄身が白くなる。春先のヨモギでは、つんとした揮発性の香りがする。

町育ちのひさ代さんは田舎暮らしに不安があったが、千種川をさかのぼって千種町に入ったところで、正面に現れた三室山(1358m)の端正な山容に感激した。子どもを通じて地域の人たちの暮らしにもとけ込んだ。

四百羽の飼育から始めた。クマが出てきて三十羽が傷つけられ、残りもストレスで卵を産まなくなったこともあった。「つらいこともあるけど、やめたいとは思わない」と和夫さん。いまでは四頭飼った犬が、クマ、キツネ、イタチ、テンを追い払ってくれている。

一日五百個の卵を全国のファンに宅配便で届けている。

「ひさ代」というタイトルの通信文を添えて。十一月号に和夫さんは「背筋が肉離れし、ひさ代に鶏仕事を全部やってみよう」と書いてくれた。和夫さんは「夕日はいいですね。自分のリズムが、地球のリズム、命のリズムに合うように修正されます」とうなずいている。

## 今井和夫さん

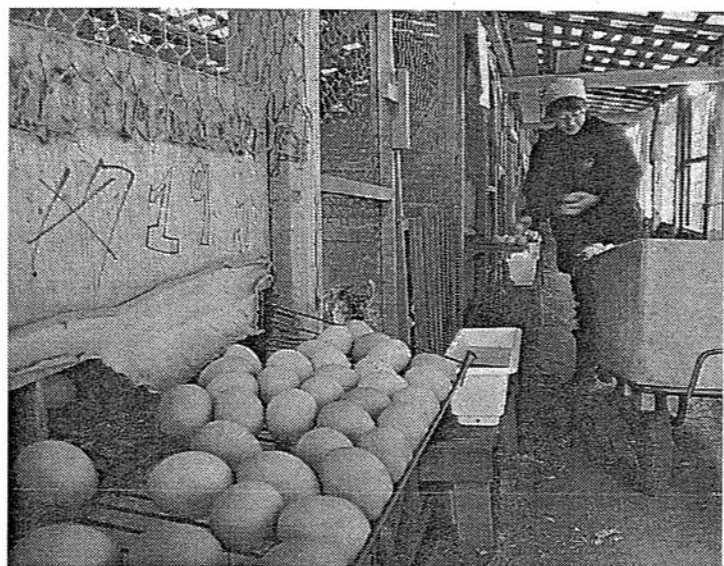
自然養鶏に  
取り組む

「地球のリズムに引き戻してもらって、人間本来の暮らしが営める」。大阪市から茨粟市千種町に移って自然養鶏を行っている今井和夫さん(仮名)は、ひげだらけの顔をほころぼせる。季節の野菜や野草を鶏に与え、「この地のあらゆるものの命がつながっている卵です」とメッセージを添えて「いまい田舎農場」のファンに届けている。

## 大阪から移住

「いまい田舎農場」は成鶏六百羽、ヒナ三百羽。産卵数一日約五百個。養鶏業では、十万羽から百万羽の規模がふ

つうだから、マイクロ規模だ。ただ、値段は一個六十五円から七十五円。それでも「際



卵は折り紙付きのおいしさ。丹精込めた世話の結晶だ

立つておいしく、そのうえ安心だ」とファンの輪が広がっている。

鶏小屋は茨粟市千種町の千種川の山に囲まれた谷あいの段々畑の最奥にある。トタン屋根の下で、土の上を元気に走り回る「平飼い」だ。「七十二羽」という基準がある。幅21センチの仕切りの中で二羽を飼う「工業的養鶏」のケージのことだ。身動きさせず、ただエサを食べさせ、卵を産ませる必要最小限のスペースだ。

「いまい田舎農場」の鶏たちはその百倍以上の空間を走ったり、飛んだり。エサは、近隣の農家で分けてもらった

かつての「慶応ボーイ、も、すっかり養鶏家の風ほうに

見つけられる!

もつむどつこの生む